

娘は二カ月半、インドネシアのシエハダさん宅でホームステイを体験し、イスラームの人々の中で生活し、貧富の差や教育が自由に受けられないことなど、悲しい多くのことを知ったのです。もちろん同時に人の温かさや自然の豊かさも知りました。日本に帰ってきた娘は、すぐに勉強がしたいと言いました。この間、娘も私も家族も本当に苦しみました。しかしこの時があったからこそ、私は教会に行きたいと思ったのです。神父様、シスター、カテキスタの方々、教会の関係者との出会いは、私を励ましをくれましたし、特にカテキスタの方は毎回、私の話に耳を傾け、静かに聞いて下さいました。そうしてそういう経験が、いつしか洗礼を受けたいという気持ちに変わっていったのです。

いろいろな事がありました、二〇〇〇年四月二十二日、晴れて受洗することが出来、また昨年二月には娘も洗礼が出来た事は、とても大きなお恵みの一つでした。これからも神様は、私たちにいろんな事を「よし」として用意されていると思います。良い事も悪い

ことも、神様はたぶん、その時に分からなくても、『どんな事にも意義がある』と気づいて欲しい・・・、そんなメッセージがあるのだと。

これからもいつもイエスさまの様に生きたい・・・を心に持つて。



『インド巡礼旅行に 参加して』

カタリナ 汲田 美智子

一月九日から十九日までの十日間、神言会のシューベルト神父様主催のインド巡礼旅行に参加しました。デリーを起点に、アグラ、コルカタ（カルカッタ）、ハイダラーバード、チェンナイ（マドラス）、ゴア、ムンバイ（ボンベイ）、インドール、デリーと飛行機を乗り継いでの旅でした。旅から帰ってしばらくは、インドから受けた刺激が強すぎて、頭の中は混乱状態でしたが、二ヶ月経った今、いろいろな思いがよみがえってきました。

訪れた町は皆、同じインドと思えないほど個性的で、それぞれ印象深かったですが、その中でも、特に記憶に残っているコルカタとワランガルでの思い出について書くように思います。

コルカタは、ガイドブックの中では「貧しく、汚く、無秩序」という形容詞付で語られています、

私にとつてはインドで最初に訪れた都市ということもあり、まさに見るもの、聞くものすべてがカルチャー・ショックの連続でした。まず驚いたのは人の多さで、十億人の人口と頭では分かっていますが、いざ目の前に、流れるように行き交う、人、人、人…。そして、車も、自転車も、荷車も、そして、牛も、ラクダも、とにかくあらゆるものがひしめきあっているのですが、一体、どこからこれだけの人が…、どこへ…何のために…と考え込んでしまうほどです。そして、路上で暮らし、物乞いしている人がなんと多いことか！インドでは八五%近くの人がヒन्दウ教の信者で、そのヒन्दウ社会では諸悪の根源のような「カースト制度」が今なお当然のように残っているようです。その身分制度の最下層にはカーストにも入れない不可触賤民と呼ばれる人たちがいて、彼らは存在そのものが不浄とみなされていて、その数は人口の一分近くもいるそうです。彼らは物乞いや不浄とタブー視された仕事をすることしかなく、来世で生まれ変わることでしか、そこから抜け出す方法がないのだそうです。コルカ